

〔翻 訳〕

『スペクテイター』(35)

——第328号から第336号——

門 田 俊 夫

第328号 1712年3月17日(月曜日)

【スティール】

苦痛が取り除かれることはない。(ホラティウス)¹⁾

拝啓

貴殿に対してこの類の苦情を申立てるのは小生が初めてだと思いますが、同様に、こんなことを小生が打ち明けるのも貴殿が初めてになります。小生はいたって健康で、資産にも恵まれ、法外な要求もしませんし、分別もあり気立てのよいとても貞節な美しい女性と結婚しており、家系を永続させていく多くの子供にも恵まれているとお話しますと、貴殿は当然小生がとても幸福な人間だと思われるに違いありません。しかし、見た目にはこのように前途洋々としているのですが、実際はそれどころではないのです。近年当世風のどの家庭にはもかなりの程度忍び込んでいるある種の浪費によって破綻し零落するのではないかという懸念で、小生は生活のすべての慰めを奪われ、どうしようもなく不安で惨めな人物に変わってしまっているのです。甘い母親の一人っ子として可愛がられた小生の細君は、幼い頃から、一般に育ちの良さとかお上品な教育と考えられるあらゆることを習得することに時間を割いてきたのです。歌を歌い、ダンスをし、リュートやハープシコードを奏で、絵も描け、フランス語もマスターし、今ではイタリア語もかなり進歩しています。その上、保存食品、ピクルス、ケーキ、自家製の果実酒、刺繍、あらゆる針仕事といったすべての家政学にも熟達しています。こう述べて来ますと、苦情を申し立てる根拠は何一つないと思われるでしょうが、小生の立場をもう少し詳しく説明するまで貴殿のご意見をお控えください。貴殿にはきっと小生の立場を理解して頂けるものと確信しています。貴殿には思いもよらないことですが、小生は、彼女が今述べた技能の行使をする、ないし、その行使に喜びを見出していることに文句を言っているのです。小生が不平を言っているのは、彼女の法外な耽溺振りのことです。ただ単に生活の無害な楽しみであり気晴らしとしてあるものが、彼女のすべてとなっているわけです。町に滞在する6ヶ月間(1年の生

1) ホラティウス『エポード』17.24

活を町と田舎を等分しているのですが) というもの、夜が明ける頃からお昼までの午前中はずっと、数人の先生を相手にしたお稽古に費やされます。そして、夏の不在によって生じた損失の穴埋めをするために、1週間1日も欠かさず先生を呼び寄せます。先生たちは全員その道の達人ですので、その技術と時間はそれ相応の報いがなくてはなりません。こういった事柄がどれほどの出費になるのかは、貴殿の判断にお任せします。「彩飾」はお金の掛からない気晴らしと思われそうですが、彼女がこれをやるとなると、彼女の出費は大変なことになります。彼女は知り合いの女性全員のために扇に絵を描き、親戚全員の細密画を描くと言えば、その出費がどれほどのものになるか容易に信じて頂けるものと思います。最初にコルマー²⁾を、つぎにチャールズ・マザー³⁾をちりばめなくてはなりません。その後続くものはこれまでのものよりさらに酷いことになります。貴殿にお伝えしましたように、彼女は針仕事の達人でして、刺繍に信じられないほどお金をかけます。マンチュア(上衣)、ペティコート、ストマッカー(胸飾り)、ハンカチ、財布、針刺しといった個人的な使用に供するものに加えて、キルト、化粧台、私室の壁掛け、ベッド、カーテン、安楽椅子、スツールといった余分な調度品を作らせるために、絶えずフランス人のプロテスタントを4名雇っています⁴⁾。小生には、彼女の浪費を改めさせることは出来そうにありません。彼女はこれらを自家製にし、自分もその製作に関わるのだから、執拗に切り盛り上手なのだと言い張るのです。物置をおびたしい数のピクルスやジャム類で一杯にするのに年間どれくらい掛かるかその詳細を貴殿にお伝えすると際限のないことになります。彼女はすべてを手に入れても、先祖代々の料理本通りに揃っていないと満足しません。彼女の女方先祖は常に切り盛り上手で名を挙げてきており、その一人は目薬と2種類のプディングに名前が付与され不朽の人となっています。軟膏、ろう引布⁵⁾、粉薬、糖菓、強壯剤、果実酒⁶⁾、橙花酒⁷⁾、チェリー・ブランデー、さらにまた無数の鉱泉水といった彼女が調合する薬のことをすべて列挙することは小生には不可能です。ところで、果物やハーブや木の汁から作るあの忌まわしいまがい物のワインのカatalogほど気に掛かるものはありません。味は酷いし、体にもよくありません。こういったワインは1年と持つことはめったになく、金のかかるものではないと言って捨てられますので、客人には最高級のブルゴーニュやシャンパン、コーヒーやチョコレート、グリーン・ティーやインペリアル・ペコヤボヒー茶⁸⁾を出した方がよほど安くつきます。ティーテーブルにそれ相応の備品が加わ

2) コルマーの広告は『スペクテイター』には登場しない。

3) チャールズ・マザーは、フリート街のテンプル・バー近くのおもちゃ屋の店主。

4) フランス人プロテスタントたちは、1685年、ナントの勅令の無効化によって、フランスから逃げて来た。彼らは刺繍と編み込みに秀でていたと言われていた。

5) ろう引布は、外科で絆創膏として用いられた。

6) 果実酒はアプリコットやチェリーで作る。果実の種は押しつぶし、ブランデーに浸す。

7) 橙花酒は強壯飲料のひとつ。

8) トマス・ショートの『茶について』(1730)によると、グリーンとボヒーの2種類を輸入している。グリーン・ティーの値段は1ポンド13シリングから36シリング。インペリアル・グリーンは1ポンド18シリング。ボヒー茶については、普通のボヒー茶は1ポンド12シリングで、コンゴが14シリン

りますと、想像を超える金額に膨れ上がります。締め括るにあたって、1点だけは彼女の長所を認めざるを得ません。彼女の儉約振りは際立っていますので、小生としてはその長所を否定すべきではないと考えています。それは子供に関することとして、男の子も女の子もすべて家の中でも一番隔絶した大部屋に閉じ込め、祖母の保母をしていた老婦人の手に委ねているのです。この大部屋が1年を通しての子供たちの居場所となっています。子供たちはその部屋から出ることは許されていませんので、彼女はしたり顔で衣服とか学問にお金を使うことは不必要だと考えています。もし執事がいなかったら、長女は今日に至るまで読み書きはしなかったことでしょう。事務弁護士の子のこの執事が一般に大法官庁の法案作成に用いられる手法を教えたのです。ここまでお伝えしますと、小生の家庭の不満に、貴殿はほとほとうんざりなさっておられるに違いありません。この手紙の冒頭で主張しようとした矛盾した内容を考慮して頂けますと、小生が決して狭量なあまりに不満を述べているのではないと同意して頂けるものと思います。これは明らかに非常に嘆かわしい真実に思えます。小生は今、小生の不運について述べたこのお話が人々のお役に立てることを心より願う次第です。小生の挙げた具体例を見て、真に高潔な細君たちは、実に不幸なことに小生を惑わせている過ちを避けるかもしれません。特につぎの3点がそうです。第一に、細君の評価の対象を誤解しないこと、それらへの愛着は単に女性の虚飾に過ぎないということを知ること。第二に、人生のそれぞれの段階を見分けること。最後に、優れた才能の乱用と悪影響は、歯止めが利いた場合にのみ、家族の祝福と繁栄につながり、極端に走ると家族の破滅と崩壊につながるということ。

敬具

第329号 1712年3月18日(火曜日)

【アディソン】

あちらへ行かなくてはならない。そう、
以前、ヌマとアックスが行った場所へ。(ホラティウス)¹⁾

先日の夜、わが友サー・ロジャー・ド・カヴァリは私に向かってつぎのように語りました。彼が言うには、ウェストミンスター寺院について触れた私の新聞を読んでいたところ、とても沢山の素晴らしい思い出があったということです²⁾。同時に彼は、私が墓についてはいずれ記事にすると約束していたのだと言い、自分は「歴史」を読んで以来訪れたことがないので、私と一緒にそこへ行きたいと言うのでした。最初、私はこの勲爵士が何故こんなことを思いついたのか想像できませんでした。昨年の夏はずっと、彼が町に来てからサー・アンドリュー・フリーポートとの論争で数回引用していたペーカーの『年代

グ、ペコーは15シリング。OEDによれば、ボヒーという名前は、紅茶が最初にイングランドにもたらされた中国福建省の武夷山に由来するとのこと。

1) ホラティウス『書簡詩』1.6.27

2) ウェストミンスター寺院については第26号参照。

記³⁾を読むことに専念していたことを思い出しました。そこで、私は共にウェストミンスター寺院に出掛けるために、明朝彼を訪ねると約束しました。

私が訪ねて行くと、サー・ロジャーはいつものように執事に髭をそってもらっているところでした。髭そりが終わるや否や、寡婦トルービーの水を一杯所望しました⁴⁾。彼が言うには、外出前にはいつもこれを一杯飲むということでした。彼は私にも少し飲むようにととても熱心に勧めますので、断ることができませんでした。飲んでみますと、とてもまづいものでした。勲爵士は私が何度もしかめっ面をしているのを見て、お気に召さないようだが、結石や尿砂にはとても効き目があるのだと言いました。

実のところ、この水の効能をもっと早く教えてくれていればよかったのにと思いましたが、不満を言うには手遅れでした。彼が善意から勧めたのだというのが分かりました。さらにサー・ロジャーは、町に滞在中伝染病に罹らないようにするためにも効き目があるのだ、そしてまた、ダンツィヒ⁵⁾滞在中に病気の第一報が入るやこれを飲んだのだと言うのでした。そして突然、そばに控えている召使の一人の方を向いて、四輪馬車を呼び、御者は初老の者にするようにと命じました。

それからまた、トルービー夫人の水の話に戻り、この夫人は田舎のどの医者やどの薬剤師よりも信頼できると言いました。彼女は自宅から5マイル以内に生えているケンを蒸留して精製するのだと、そして、誰にでもその水を無料で配るということでした。さらに、勲爵士は彼女には多額の寡婦資産があり、田舎の人は全員、できれば彼女と自分とを一緒にさせたがっているのだと付け加えました。もし私が婚約していなかったとしても、彼女とはうまくはやれなかっただろうな、とサー・ロジャーは言います。

彼の話は、召使の馬車が着きました、との声で中断しました。私たちが馬車のところへ行き、車輪に目をやってから、彼は御者に車軸は大丈夫かと尋ねました。御者が請合いますと言うと、勲爵士は正直そうな御者だねと私に言い、それ以上堅苦しいことは言わずに馬車に乗り込みました。

少し進んだ時、サー・ロジャーは顔を突き出して、御者に御者席から降りてくると言いました。御者が窓のところに姿を見せると、タバコを吸うかねと尋ねました。私がどういうことなのかと考えていますと、サー・ロジャーは御者に途中のどこか信用のできるタバコ屋で停めてヴァージニア⁶⁾を手に入れて欲しいと頼みました。その後は何もなく、ほどなくして馬車はウェストミンスター寺院の西側に到着しました。

寺院の身廊に入って行きますと、勲爵士は最近出来た記念碑のひとつを指差し、きっと勇敢な人物なのだと大きな声を上げました。その後サー・クラウズリー・シャヴェル⁷⁾の

3) 『年代記』については第37号参照。

4) トルービーの水は有名なものではないが、サー・ロジャーの隣人トルービー夫人が作った水。

5) ダンツィヒはポーランドの町で、1709年ペストが猛威を振るった。1709/10年、1月14日付け『ポストマン』紙では、1709年に2万4千人がこれで亡くなったと報じられた。4万人が犠牲になったとの推計をするものもあった。

6) ヴァージニア・タバコについては第134号参照。

そばを通りかかると、手を差し伸べ、サー・クラウズリー・シャヴェルよ、勇猛果敢な方よ、と声を上げました。バズビーの墓の前に立つと、勲爵士は同様に、バズビー博士、偉大なる方よ、この方は偉大なるわが祖父を鞭打ったのだ、私が愚か者でなかったら、私もこの方のお世話になったのに、とつぶやきました⁸⁾。

私たちはすぐに右手にある小さな礼拝堂へと案内されました⁹⁾。歴史家のそばに立ちはだかっているサー・ロジャーは、彼の言う一言一句に、特に、モロッコ王の首をはねた貴族の説明に耳をそばだてていました¹⁰⁾。その他数名の人物の中でも、彼はとても満足気に、政治家セシルをひざまずいて見ていました¹¹⁾。そして、みんな偉人なのだというのでした。その後針が刺さって亡くなった良妻賢母の殉教者の像のところに案内されました¹²⁾。ガイドがこの方はエリザベス女王の女官だったのだと言うと、勲爵士は彼女の名前と家柄について知りたがりました。しばらく彼女の像を見つめた後、どうしてサー・リチャード・ベーカーは年代記で彼女のことに一言も触れなかったのだろうか、と彼は言います。

その後、二つのコロネーション・チェアのところへ連れて行かれました¹³⁾。わが親友は、下にあるスクーンの石¹⁴⁾はスコットランドから運ばれた古の石であり、「ヤコブの枕」と呼ばれるのだと聞くと、その椅子に腰をかけました。そして、古のゴート王のように見えるが、ヤコブはスコットランドにいたことがあるのかとガイドに尋ねました。ガイドはそれには応えず、名誉の喪失の代価を払ってくれることを望んでいると言いました。こういった言い方に、サー・ロジャーが少々苛立っているのが分かりましたが、ガイドは要求に執着しませんので、勲爵士はすぐに機嫌を取り直し、私の耳元で、ウィル・ウィンブルと一緒に来ていて、この二つの椅子を目にしていたら、きっとこの椅子でタバコ詰め具を作って面倒を引き起こすことになるよ、と囁きました。

つぎに、サー・ロジャーはエドワード3世の剣¹⁵⁾に手を置き、剣の柄頭に寄りかかりながら、黒太子の全史を語り、サー・リチャード・ベーカーの考えでは、エドワード3世はかつてイングランドの王座に就いた最も偉大な王の一人だったのだと結びました¹⁶⁾。

7) シャヴェルについては第26号参照。

8) リチャード・バズビー博士は、1640年から亡くなる1695年まで、ウェストミンスター校の校長を務めた。彼は寺院の南側廊に埋葬された。「彼の生徒たちは、彼の大理石の碑を見ると、臀部への激しい鞭打ちを思い出して蒼ざめる」のだとトマス・ブラウンは記した。

9) これは聖エドマンドの礼拝堂のこと。

10) この人物はサー・バーナード・プロカス(1395年死亡)のこと。ただし、モロッコ王の首を刎ねたとの話は単なる言い伝えのようだ。

11) バリー卿ウィリアム・セシル(1520-1598)のこと。

12) これは第二代ベッドフォード伯の第二子ラッセル卿ジョンの娘エリザベス・ラッセルのこと。

13) フォン・ウッフェンバッハもウェストミンスター寺院の注目すべきものとしてこの椅子のことを「座っただけで罰せられる」と記した。

14) スクーンの石は、エドワード1世が14世紀初頭にスコットランドからイングランドへ持って来た。

15) エドワード3世が戦いで使用した剣で、今も存在し重さは8ポンド、長さ7フィート。フォン・ウッフェンバッハは「長さ約2メートル、幅約34センチで非常に重い」と記している。

16) ベーカーは『年代記』で、エドワード3世の記述にフォリオ版で20ページ費やした。

その後、懺悔王エドワードの墓へ連れて行かれました¹⁷⁾。すると、サー・ロジャーはこの王が悪魔に手を触れた最初の王であり、これに続いたのがヘンリー4世だったのだと言いました¹⁸⁾。このとき、彼は首を横に振り、この治世の犠牲者については素敵な読み物があると言いました。

つぎに、ガイドはイングランド王の一人¹⁹⁾で頭部の欠けた記念碑を指差しました。そして、頭は銀を打ち延ばして作られたのだが、数年後に盗まれたのだと説明しました。きっとホウィッグの仕業だよ、王にはきちんと鍵をかけておかななくてはいけない、用心しないと体まで持って行ってしまうよ、とサー・ロジャーは言います。

ヘンリー5世やエリザベス女王といった輝かしい名前を耳にして、勲爵士は大層目を輝かせ、サー・リチャード・ベーカーを認めるのでした。勲爵士が驚きを込めて言うのですが、ベーカーはウェストミンスター寺院で自分が目にする事のなかった数多くの王について触れているというわけです。

私はどうかと言いますと、勲爵士が国の栄光に対して非常に誠実な情熱を示し、諸王を偲んで敬意を込めた心からの謝意を表明しているのを見てとても満ち足りた気持ちになりました。

交わるすべての人々に向かって注がれるわが善良な親友の善意のお陰で、彼が変わり者となししているガイドに対してもとても優しく接します。そのため、別れるときには、ノーフォーク・ビルの住まいで会って²⁰⁾、いろいろゆっくり話ができると嬉しいのだがと言いながら握手をするのでした。

第330号 1712年3月19日（水曜日）

【スティール】

子供たちは私たちの最大の敬愛を求める。(ユヴェナリス)¹⁾

つぎの2通の手紙は、共に年齢が20歳未満のとても思慮深い寄稿者からのものですが、若者の教育に影響を与える多くの出来事を考慮する必要性を説いたものとなっています。

17) 懺悔王エドワードは、アングロ・サクソン時代最後のイングランド王で、1066年に死亡し、1161年に聖者に列せられた。1163年に聖堂が準備され、後にヘンリー3世が新しい聖堂を準備し、1269年10月13日、遺体が祭壇の東側に移された。

18) ヘンリー4世の墓はカンタベリー大寺院にある。ここでの言及はおそらく懺悔王の聖堂の北側にあるヘンリー3世の墓のことだろう。

19) 懺悔王の礼拝堂の東の端にあるヘンリー5世の墓。肖像は銀箔が施された柩の木で出来ており、頭部は純銀製だった。16世紀に盗まれた。

20) 旧ノーフォーク宮殿の敷地に建てられた住宅。通りとしては、アランデル、ノーフォーク、サリーがあった。

1) ユヴェナリス『諷刺』14.47

拝啓

私は長い間、人生のいくつかの場面における貴方のお考えの中で、貴方はまだお触れになっていらっしゃいませんが、私が失礼をも顧みず推挙しますテーマについていつの日か取り上げて頂けるものと期待してきました。私が言いたいのは、慎重深い若者を支援し、それによって若者たちを社会に送り出して貰いたいということです。こういった助けがありませんと、優秀な若者も、境遇に恵まれませんと世に知られることもなく過ごすか貧困のうちに惨めな生活を送ることになり、裕福な場合は、放蕩に走ったり不節制に走ったりすることになります。私としては自分の履歴をお話するくらいのことしか出来ませんが、これは想像し得る最高の責務に対する私の感謝の念を表明する唯一の方法ですので、どうかこれを貴紙に掲載して頂きたいと思います。

私はロンドンの商人の息子です。父は多くの損失を抱え、とても成功した商売人から以前の豊かさとは似ても似つかない貧しい境遇へと追いやられてしまったのです。このため、父は気力も何もかも無くしてしまっていて絶望的になったあげく、不幸の最中に私の母を埋葬した後、遺書も残さず死んでしまいました。父が亡くなったとき、私は16歳でした。そして、私には年間200ポンドの遺産が残されました。この遺産を管理し享受する方法を教えてください友人も後見人もいませんでした。そのため当然の帰結として、(私は相談相手が必要としませんでした)、ほどなくして私をハイカラな紳士へと導く仲間ができ、あらん限りの放蕩に引きずり込まれたのです。私の仲間も私も借金なしではやっていけなくなったのです。私は性懲りもなく借金を繰り返し、ついには逮捕されて屈強な護衛付で執行官のところまで連行されました。そこで4日間とても陽気だがあまり愉快ではない人々に取り囲われました。この恥ずべき禁固状態から解放されるとすぐに、おぞましい思いに駆られ、これまでの知人とは縁を切り、法律の勉強に打ち込む決意をして、法曹学院の弁護士事務室に入りました。膨大な数に及ぶ複雑な事情を調べることで、疑問点を相談する友人もいなく、丸1年間浪費しました。そのため、私は、向上する能力が身につく前に、単に安全な場所におくという目的から学校にやられる幼い子供たちのような状態で過ごしたに過ぎませんでした。身の処し方が分からないこの不安な状態になっていたときに、親戚の人が私を捜し出して、私の優れた気質を認めて、とても親切に扱ってくれ、田舎の彼の屋敷に連れて行ってくれたのです。田舎に着きますと、彼は私をこの地方の立派な方々に引き合わせてくれました。この心優しい好意とそれ以来与えて貰っている住まいに対する彼に対して抱くこの上ない恩義はとても強固なものです。私は彼に対しては兄への愛情を基盤にした父の権威を感じ取っているのです。素晴らしい書物も馬もいつでも好きに利用できます。私はまだ18歳にもなっていませんが、持ち前の人懐こさと強い気持を発揮し、どこでも好まれる人物となっています。したがって、観察者様、この紳士の好意と引き立てがありますので、もし私が送る日々が賢明で豊かなものにならないとしたら、それは私が悪いのです。彼に感謝の気持ちを示すために私の名前の頭文字を記します。そして、他の人々にも彼の高潔さを真似て欲しいものと考えています。犠牲を払わずにとっても大きな慈悲を施すことができること、そして、多くの気高い行為もそれが可能な人物の場

合でも怠慢によって不可能になってしまうことを示すのは、価値のあることと思います。州の地位のある紳士が自分の家族を謹厳と良識と育ちの良さのお手本にし、周囲の若い人々の教育に影響を与える努力をすれば、彼は公の場で大量のビールを出さなくて済みますし、代表者になるために若者たちの暴動や騒動に付き合わされることなく、彼に対する感謝の念からリーダーとなることは間違いないと思います。学問の何らかの分野で向上し、専門職の地位を得た人々にも同じことをお勧めできます。後見人によって地位や富を得る人々もいるかも知れませんが、私は立派な習慣と美徳を得たいと思っています。繰り返しになりますが、是非これを活字にしてください。無力な孤児が悪の道に入らずに済み、あらゆる善を受け授けられたのも、すべてはこの紳士の好意の賜物であることを。

敬具

エス・ピー

観察者様

僕はもうすぐ14歳になる少年です。勉強が大好きです。ラテン語の学校に入って4年になります。いまだかつてズル休みをしたこともなく、先生が出す課題をおろそかにしたこともありません。正午と夜に帰宅するときには、学校で読んだことを思い起こします。熱心になるあまり、どこを歩いているか分からずに、しばしば半マイルほど行き過ぎてしまいます。わが家のお手伝いさんが言うには、寝ているときにラテン語を喋っていることがよくあるとのこと。週に2、3回ユヴェナリスやホメロスを読んでいる夢を見ます。先生は僕がクラスのほかの生徒と同じように頑張っていることに満足しているようです。僕の考えがぐらつかないとしたら、僕は学問のない王子様になるよりはむしろ学者になる道を選ぶものと思います。僕にはとても立派な優しい父がいます。父はとても裕福なのですが非常な儉約家ですので、僕の教育に掛かる費用のことを気にしています。父はしばしば僕に、書物にいくらかかるか分かったものでない、このままだと破産してしまうと言います。1冊欲しいと父に言うのにもびくびくします。やむを得ず僕は小遣いを貯めておいて、時々父の知らない本を買い求めます。父は先生にはこれ以上僕に本を買わせないように言います。自分が買ってやるからと言うのです。先日、僕は父にホラティウスの本を買って欲しいと頼みました。すると、父は僕にはまだホラティウスは無理だと言うと怒り出しました。先生だけは僕が相当進んでいるのだということを父に分からせたいと思っていました。時折、僕は先生の言う本を入手するのがほかの生徒たちより1ヶ月遅れることがあります。僕以外の生徒は全員、背表紙に金箔と刻印のある古典選集²⁾を持っています。父はしばしば僕がいつまで学校に行くのか気がかりで、何の役にも立たないのではないかと言うのです。僕は父の態度に落胆させられ、やる気もなくなり憂鬱になってしまいます。先生はどうしたのかと尋ねますが、僕はどう返事してよいかわかりません。なぜなら、先生は勉強を奨励するのが大好きな方ですし、父の気質を知らずに父をたしな

2) 古典選集とは「王太子古典双書」のことで、1674年、ピエール・ダニエル・ユエがアン・ルフェーブルの助けを借りて、監修した。

めようとするからです。たしなめでもしたら、状況はさらにひどくなるに違いないからです。もし観察者様が学問を愛しておられるなら、お願いですから僕のような場合にはどうしたらよいか教えてもらえませんか。そして、勤勉で勉強したいと考えている子供たちがいる場合には、両親を説得して勉強をさせてやって貰いたいのです。両親の中には、子供たちが勉強したいと考えている場合には、どんなことでもしてあげる人たちがいると聞いたことがあります。とても喜ばしいことだと思います。どうか僕の厚かましいお願いを許してください。どうか僕の状況に同情して頂きたいと思います。僕の生きている限り、観察者様がますます繁栄されますようお祈りします。

3月2日、ロンドンにて、ジェイムズ・ディシプラスより

第331号 1712年3月20日(木曜日)

【バジェル】

もじゃもじゃの顎鬚が砦となる。(ペルシウス)¹⁾

先日、わが友サー・ロジャーとウェストミンスター寺院にいたとき、ある尊敬すべき人物の胸像の前でいつもになく長時間彼が留まっているのに気づきました。私はどうしてなのかと不思議に思いましたが、しばらくすると、彼がその像を指差して、我々の先祖は顎鬚をつけているほうが賢く見えるよねと言いました。自分としては、田舎の屋敷の絵画陳列室にいるとき、わが先祖の多くが自分の年齢に達するまでに亡くなったのが分かったと、彼らのことを古老として尊敬せざるを得ません。同時に、自分自身のことを怠惰で軟弱な若造としか見えないのだ、と彼は言います。私は顎鬚を腰帯の下まで伸ばし、壁掛けの半分までになっているタペストリーに描かれている君の家のアブラハム、イサク、ヤコブを見たいと言います。私が紙面で顎鬚を奨励し、顔に古来の威厳を復活させようとするのなら、1ヶ月もすれば、自分が頬髭を生やして流行させて見せると勲爵士は付け加えました。

私はわが友の思いつきを聞いて微笑みましたが、別れた後で、髭ひとつでいかに顔が変わるかということについて考えざるを得なくなりました。

わが友サー・ロジャーの考えにかなった顎鬚は、長年に渡って知恵の典型と見なされたのです。ルキアノスは何度も、顎鬚で競って、顎鬚が短いからという理由で哲学者の資格がない言い合う当時の哲学者たちを揶揄しました²⁾。

アエリアヌスは、ホメロスやプラトンを酷評し、先人たちの誰よりも自分の方が賢明だと考えた自称批評家のゾイロスの解説の中で、ゾイロスは胸までの長い顎鬚を生やしていたが頭髮はいつもきちんと剃っていてつるつるだったのだと語ります。頭髮は生えようとすると顎の栄養分を取ってしまい、顎鬚が生えなくなってしまう役立たずと考えたようです。

1) ペルシウス『諷刺』2.28

2) ルキアノス(117?-180?)はギリシアの諷刺作家。

ある教皇が贈呈されたある聖人の書物を、書物に掲載されたその聖人の肖像画に顎鬚がなかったという理由で、それを受け取るのを拒んだというのをどこかで読んだことがあります。

以上の例を見ますと、以前は顎鬚に大きな敬意を払っていたことが伺えます。そして、散髪屋は、後年は許されたのですが、当時は学者の顔の髭を剃り落とすことは出来なかったのです。

そういう次第で、顎鬚というささやかな飾りをととても気にかけている国が見受けられます。こういった国では、この点をもっぱら名誉にかかわる問題だと考えているようです。スペイン人はこれに対してとても敏感でした。ドン・ケベードは、最後の審判の第三の夢の中で、その気質について述べています³⁾。彼によりますと、ある自惚れの強い同国人が、宣告を受けた後、二人の悪霊に拘束され、たまたま教導者たちがその人物の口髭の形を乱したとき、連行するにはカール用アイロンで整えざるを得なかったということです。

わが国の歴史をひもといてみますと、顎鬚はサクソンの七王国時代に隆盛を極めました。が、ノルマンの時代になると衰えたことが分かります。とはいえ、その後も間欠的に形を変えて登場したのです。好奇心溢れる読者ならお分かりのように、最後の奮闘はメアリ女王の時代だったようです。プール枢機卿やガードナー司教の肖像を見ていただければ分かります⁴⁾。もっとも、反ローマ・カトリックへの熱意によって、プロテスタント派の画家が彼らを凶暴に見せるために、必要以上にこの二人の迫害者の顎鬚を長くしたことは間違いないものと思います。

ジェイムズ1世時代には特記すべきものはほとんど見当たりません。

大内乱のときには、一人登場しました。この人物はあまりにも著名ですので、黙って見過ごすわけにはいきません。私の言いたいのは、おそろべきヒューディブラスの髭なのです。これについて、バトラーは後世の人々につぎのような詩行を残しています。

彼の黄褐色の顎鬚は、彼の知恵と顔つきの双方を

ひとしく際立たせるのだった。

型と色合いは、まさしくタイルのようで、

突然目にすると、その上部が乳漿色で、

下部がオレンジとグレーの混色であることは分らない⁵⁾。

頬髭は顎鬚が消えた後もしばらく続きました。でも、これについてはここでのテーマではありませんので、別の機会に譲り、口髭のところで述べることにします。

顎鬚を持ち込もうとするわが友サー・ロジャーの計画が功を奏しますと、今日では大変高くつくことになるものと私は危惧します。伊達男はこの上なく淡い色で極端に長い偽の髭を付けるに違いありません。サー・ロジャーが認めていると思われるタペストリーの大きさの金髪の顎鬚は、ゆうに20ギニーは掛かるでしょう。有名なエスキュラピウスの金色

3) 『ケベード・ビリェガスの夢』参照。ケベード(1580-1645)はスペインの諷刺作家。

4) ガードナー司教(1483?-1555)は、メアリ1世の反宗教改革を支持して新教徒を迫害した。

5) 『ヒューディブラス』1.1.239-44

の顎鬚⁶⁾も、流行の贅を尽くして作られる顎鬚ほどの価値はありません。

おまけに、ご婦人方が馬で散歩に出掛けるとき、これを取り入れないとも限りません。ご婦人方はすでに帽子や羽毛、上衣や鬘を取り入れています。彼女たちはきっと乗馬用の顎鬚をつけるものと思われます。

これに関わる教訓は別紙に譲ることにします。

第332号 1712年3月21日(金曜日)

【スティール】

彼は時代のからかいに耐えることができない。(ホラティウス)¹⁾

顔の短い方へ

先週水曜日の思索において、貴殿はモーホックという人でなしが徒党を組んでいるご立派なクラブについて少し述べられていました²⁾。その中で、貴殿は親指で鼻を捻じ曲げる連中やダンスの師匠や軽業師たちの巧妙な所作については事細かに述べておられました。だが、お気づきのように、そのときにはこのクラブのことを完全には掌握なさっておられませんでしたので、とても名高い種族で、ある意味ではダンスの師匠とも考えられる「発汗者」³⁾のことを見落とされています。どうやら、元気者の野蛮人どもは6人ないしそれ以上の連中でもって、汗をかかせようとする獲物を取り囲むとすぐに、剣を抜き、地面に這いつくばらせて魔法の円を描くのが習わしとなっているようです。これが終わるとすぐに、獲物は確実に体が温まり、汗をかきだします。すると、連中の一人がちょうど子供が処罰を受ける尻に剣の切っ先を向けるのです。容易に想像できますように、これによって獲物にはまた別の切っ先が突きつけらるることになります。これが2、3回繰り返され、獲物が十分汗を出したと考えられますと、連中がそのために引き連れているお供のものが何名かよってたかって獲物の汗を拭いてやります。最近この試練を受けたある友人からこの話を聞いたのです。彼が言うには、自分は名誉なことに皇帝様の御前で、皇帝陛下とその家来たちの拍手喝采を浴びながら飛び跳ねたということです。多分、私にしてもまた知人にしても誰一人、彼が名声に値する活動をしたとは夢にも思わなかったに違いありません。

断言できますが、私はこれをそう呼ぶのですが、この歩く浴場について真に迫った、かつ、痛みを伴った説明をする資格を手にしたのです。といいますのは、先日フリート街を歩いていて、好奇心から同じ方向に歩いている女性と話を始めたとき、私たちに向かって二人が剣を抜き、「汗だ！ 汗だ！」と大声を張り上げたのです。それに対して、この連中はこの浴場の首謀者たちに違いないと思って、私も剣を抜き、和平交渉を要求したので

6) キケロ『神々の本性について』3.34.83

1) ホラティウス『諷刺』1.3.29-30

2) 第324号参照。

3) 「発汗者」は18世紀に登場した町の無法者のこと。人々に汗をかかすことを目的に脅したり襲い掛かった。

す。だが、誰も私の要求を聞き入れずに、二人の背後に控えている連中が今にも私の脇腹を突こうとしているのが分かって、私は恐怖のため汗が出始めました。ところがとても幸運なことに一目散に逃げ出して、うまいこと、背後の路地の暖かく気持のいい一角を見つけたのです。私はそこに半時間以上に渡ってじっと動かずに留まっていました。それでも絶えずストリートの方に気をつけていました。このように慎重に対処することで、この件では手荷物を無くしたことで靴のかかとを片方剥がした程度でそれ以外には大した被害も受けずにうまくやり過ごしました。今ではかなり気を取り直しているのです。これらの発汗者は、友人から知ったこと、および、私自身が経験しかかったことからすると、目下、非常に粗野な規律を持っているように思えます。おそらく、貴殿に少し努力して貰えば、彼らは秩序を守ることになるに違いありません。私としましては貴殿のご判断にお任せすることとし、つぎのことだけを付け加えておきます。もしこの種の吸角法から肌を守りたい人々への警告として、同時に、夜間うろつき回る連中の危険を明らかにする手段として、貴紙にこの件を掲載する価値があると判断なさると、貴殿はおそらく私だけに限らずその他大勢の人々のためになることは間違いありません。

敬具

敏捷なジャックより

追伸

わが友人が知らせておいて欲しいとのことですが、友人は決してあの人並みならぬ弓術家である意気盛んなウィル氏の長所を減じる積もりはないとのことですが、友人の本音では、このところ流行しているこの浴場のマッサージ師として雇われている人々の中には、いまだかつてないほど大胆な手際を発揮している者がいるとのこと。

「浴場」という単語の正字法に大きな疑問を持つという災難に見舞われていなければ、1日早くこの手紙を出していたところです。辞書数冊にあたったのですが、安心できなかったのです。最終的には、ニューゲート街とチャンセリー街双方の浴場を頼りにして、その道標に記されている原文のつづりを見て確認したありさまです。そこで、大いに満足して帰宅し、この手紙を投函した次第です。

観察者様

貴方は人生におけるほぼすべての出来事について考察なさっておられますので、末尾に署名しました私たちは、私たちの置かれている状況をお知らせしても大丈夫だと考えた次第です。私たち三名は田舎に住んでおり、私たちが向上できる最大の手段は読書なのです。私たちはささやかな日記をつけていますが、先週火曜日の貴紙の思索とは正反対であることが分かります⁴⁾。私たちは7時までには起床し、1日はお祈りから始まり、隠遁生活で起る出来事を振り返ります。午後になりますと、友人や近隣の人たちと過ごすときもありますが、それ以外は仕事をしたり読書をしたりして過ごします。夜になりますと、それぞ

4) 第323号参照。

れ自室に入り、10時になりますと夜はずっと一人で過ごします。観察者様、私たちは嫌な日曜日を迎えないように特別の注意を払います。私たちは全員申し分のない乙女で、賞賛に値する人物つまり申し分のない妻になりたいという大望を抱いています。もし貴方の寄稿者のどなたかが、借金のない誠実な田舎の紳士の配偶者の問い合わせをしており、収入の半分を蓄えることができる細君をお探しで、立派な育ちの細君のいる同程度の資産家の近隣の人に負けたくないと思っておられるなら、どうぞ私たちにご一報下さい。

草々

働き者のマーサ、儉約家のデボラ、早起きのアリス

第333号 1712年3月22日(土曜日)

【アディソン】

争いへと、神々に呼びかける。(ウェルギリウス)¹⁾

本日は、天使たちの戦いについて描く『失樂園』第6巻に入ります。ミルトンは、第5巻までに、読者の期待を喚起させ、いくつかの節で読者にその心準備をさせています。私はこういった節については、故意に本日の冒頭のために残しておくために、これまでの批評では引用を避けて来ました。この壮大な行為については、ミルトンの想像力に火がつきますので、彼が口を開く箇所ではどこでも、彼の心はこの上なく高ぶっています。ミルトンは『失樂園』冒頭でサタンについてつぎのように述べます。

全能の力をもち給う神は、大胆不敵にもあえて全能者に
向かって武器をとって刃向かってきたこの者を、
いと高く淨き空から真逆様に落とし給うたのであった。
彼は凄まじい勢いで炎々と燃えさかる焔に包まれて、
奈落の底へ、底知れぬ地獄へと、墜落していったのだ。
そこには、強力無比な鎖に縛られた業火に包まれ呻吟する
運命が彼を待ちうけていた²⁾。

同様に、黄泉の国の会議には、これを暗示する気高い点がいくつか見受けられます。

おお、首領よ！ 戦列を整えた熾天使の軍勢を
指揮して戦いに赴かせ、……
われわれを情容赦もなく破り粉碎し、無残にも天国から
追放し去ったこの度の悲しむべき事件を、わたしも嫌というほど
この眼で見、口惜しく思わぬではない。この強大な軍勢が破滅に瀕し、
かくも惨めな状況に……
だが、見るがいい！ あれほど怒っていた勝利者は、復讐と追跡の任務を

1) ウェルギリウス『アイネーイス』6.172

2) 『失樂園』第1巻、44-49行。

命じていた麾下の天使らを天国の門へと呼び戻してしまった。
われわれの背後からあらしのように降り注いでいた硫黄の霰もはや止み、
天の崖縁から真っ逆様に転落するわれわれをも
呑み込んでいた火焰の狂瀾も静まってしまった。赤い閃光と
耳を聳する怒号を放ってわれわれを追撃していた雷霆^{いかずち}も、
もはや補給がきれてしまったのか、この漠々たる無限の地獄を
つんざくその咆哮をやめてしまった³⁾。

第1巻には、同様にとても崇高なイメージが散見されます。これはまた第2巻においてもそうです。

では、われわれが天の凄まじい雷霆^{いかずち}に追われて潰走し、
先を争って逃げ廻り、隠れ場所を混沌の世界に求めたあの時の
状態はどうであったか！ あの時、この地獄こそ深い痛手を避ける
恰好の逃避場と見えたのではなかったか⁴⁾。

端的に言って、ミルトンはこの戦いのことには触れず、このテーマにふさわしい偉大さと恐怖のイメージを膨らませます。中でも、第3巻において⁵⁾、混沌を支配する権力者が喋る一節を引用せざるを得ません。

こうサタンは語った。これに対して年老いた「混沌王」^{アナーク}は
次のように答えたが、その言葉はたどたどしく、顔には狼狽の
色が浮かんでいた。「見知らぬ者よ、わたしはお前を知っている、
お前が誰だか知っている。そうだ、お前は近頃天の王に叛逆し、
結局地獄に墮されたあの強力な大天使に違いない。わたしはこの眼で見、
この耳で聞いた。あれほどの夥しい軍勢がこの虚空を慄えあがらせ、
つんざいて、壊滅に壊滅を重ね、敗走に敗走を重ね、混乱にさらに
混乱を重ねて墮ちていったのだ、その凄まじい音は尋常一様なものでは
なかった。それに天の門からも勝ち誇った軍勢が幾百万となく
躍り出て、敗走する軍勢を追撃するのわたしは見た⁶⁾。

この戦いを読者の心を奮い立たせ驚かせるような出来事で満たすためには、創意に富んでおり、想像力が強力でなくてはなりません。同時に、浅薄で卑小と思える点をすべて排除するためには、的確な判断力を必要とします。ホメロスの『イーリアス』をひもとく人々は、彼の描く戦いがつぎつぎに発生し、恐怖を募らせていき、結末へとつながっていくことを知って驚きます。ミルトンの天使たちの戦いもこれと同様に見事に描かれています。戦いの先触れとなっているのは、激怒した全能者にふさわしい怒りのしるしなのです⁷⁾。

3) 『失樂園』第1巻、128-9行、134-7行、169-77行。

4) 『失樂園』第2巻、165-8行。

5) 実際は、第2巻。

6) 『失樂園』第2巻、988-98行。

7) 『失樂園』第6巻、56-60行。

最初の戦闘は、両軍から放たれる無数の燃え盛る弓と矢が飛び交う焔の天空の下で行われます⁸⁾。二度目の戦闘は更に激しいもので、勝利を危ぶませると思える人為的な雷霆で充滿し、善天使たちの間にさえ、ある種の誇示が見受けられます⁹⁾。この後に、山々や崖が引き抜かれ、最後には、威厳と恐怖を漲らせた救世主が登場します¹⁰⁾。雷霆が鳴り渡り、火花が飛び交い、戦車の轟音が轟きわたる中に登場する救世主の壮観さは、人間が持つ最大限の想像力を駆使して描かれています¹¹⁾。

最初で最後の戦闘の日々ではいずれも、大半の読者が天使たち両軍の戦闘で想定するのに十分なほど自然でふさわしいものとなっています。

2日目の戦闘は想像力を驚かせそうです。この描写は古代の作家、とくにホメロスを讀んだ場合には喚起させられることはありません。反乱を起した天使たちに武器の使用を許しているのは、きっとミルトンの極めて大胆な思いつきであつたに違いありません。こういった破壊的なことを思いついたことは、これらの作家に起因するのですが、終始威厳が求められる神の考えにうまく合致します。こういった武器は雷霆を模倣するために利用できたと考えられる唯一の道具でしたので、聖俗を問わずすべての詩において、全能者の武器として描かれます。山々を引き抜くことは、すべてが前者ほど大胆な思いつきではありません。私たちは古代の詩人で出くわす巨人の戦いの描写によって、この点についてはある程度心積もりができています。さらにこの事情を詩人が用いることに妥当性を与えているのは、古代に大きな評判となり、ヘシオドスの作品に見られる実に崇高な描写を生むことになった巨人の戦いという神話は、まさにこの善天使と悪天使の戦いという伝承を基盤にした寓話だったのだというのが多くの学識者の考えなのです¹²⁾。

おそらく、ミルトンがこの叙述ではラテンおよびギリシアの詩人たちの描写における平凡で取るに足らない点をすべて排除したのはどういった判断であつたのか、同時に、ミルトンがこのテーマの諸作品から受けた手掛かりにどういった改良を加えたのか検討してみる価値があるものと考えます。ロンギノスがその崇高さを称え¹³⁾、ウェルギリウスとオウィディウスがお手本とした文章の中で、ホメロスはつぎのように語っています。「巨人たちはオッサの山をオリュンポスの上へ積み上げ、オッサの上にペーリオンの山を載せた」¹⁴⁾、と。ホメロスはペーリオンに異名を付けます。これは想念を大いに膨らませ、読者はペーリオン山に成育する森蔭を思い起こさせます。ギリシアの人々に非常によく知られているこの3つの著名な山の名前を持ち出した点にはさらに大きな美点が伺えます¹⁵⁾。ペーリオン山は、おそらくミルトンの戦いの場面にはない美しさを持っています。クラウ

8) 『失樂園』第6巻、212-17行。

9) 『失樂園』第6巻、582-90行。

10) 『失樂園』第6巻、639-69行。

11) 『失樂園』第6巻、749-72行。

12) 『神統記』664-745

13) 『オデュッセイア』2.315-16

14) 『崇高について』8.2

15) アディソンは「古今の学問について」の中でもこの点を指摘している。

ディアヌスは、巨人の戦いに関する断章で、彼本来の天衣無縫な想像力を縦横に発揮しています。クラウディアヌスは、「巨人が島ごと根こそぎにして神々に向かって投げつけた」と語ります。特に、「ある巨人はレムノス島を両手で持ち上げ、そこにあるウルカヌスの作業場ごと、天空に向かってこれを放り投げたのだ」と語るのです。また別の巨人はそこに流れるエニペウス川ごと、イーデー山を引き抜きます。クラウディアヌスは両肩に山を背負わせるだけでは満足せず、両肩に背負ったままの姿勢で、川はその巨人の背中を伝って流れるのだと語ります¹⁶⁾。賢明な読者なら誰もが、明らかにこの考えは崇高というよりも戯画に味付けをしていると考えます。これは気まぐれな想像力から生まれ、想像力を驚かすというよりもむしろ気晴らしを与えるのです。ミルトンはこういったいくつかの文章の崇高な点をすべて取り入れ、そこからつぎのような壮大なイメージを生み出します。

大地にどっかと根をおろしていた山々そのものを、
その上に蟠居している岩や滝や森もろとも引き抜き、
鬱蒼たる山頂を引っ掴んで両手で高々と持ち上げた¹⁷⁾。

以上の短い表現には、クラウディアヌスの想像力の稚拙さは改良されたホメロスの威厳が十分に発揮されています。

墮天使たちの描写についてはわざわざ指摘するまでもありません。山々の尾根が凄まじい勢いで彼らの頭上に降りそそぎます。第6巻にはその他顕著な美点が数多く見られますので、大半の読者は必ず目を留めるに違いありません。

実際、第6巻には数多くの見事な筆致とさまざまな崇高な考えが伺えますので、それらをすべてここで取り上げるのは紙幅の関係上不可能です。その上、その大部分はすでに翻訳詩に関するロスコモン卿の評論の最後で扱われています¹⁸⁾。第6巻の見事な腕前については、高潔な著者が気づいていない点はいくつあるのですが、そちらをご覧になれることをお勧めします。

ミルトンは崇高な才能の持ち主ですが、第6巻では手助けとして古代の詩人たちの助けを借りています。悪天使たちの間に大混乱を引き起こすミカエルの剣は、神の武器庫から賜ったということです。

ただ、ミカエルの剣は神の武器庫から賜ったものだけに、
さすがに鍛えぬかれており、その刃にはどんな鋭い剣も
刃向かうことはできなかった。一挙に屠り去ろうと真向から
激しい勢いでふりおろされたその剣を、サタンの剣がはっしと
受け止めたが、その次の瞬間、真っ二つに切断されてしまった¹⁹⁾。

この一節はウェルギリウスの一節の模写です。ウェルギリウスによれば、神から授かっ

16) クラウディアヌス (c. 370-c. 404) 『ギガントマキア (巨人の戦い)』62-91。クラウディアヌスについては、第279号、第285号でも、偽りの崇高ということで登場する。

17) 『失楽園』第6巻、643-6行。

18) ロスコモン卿の『翻訳詩について』の終わり近くで、「失楽園第6巻の無韻詩」が登場する。

19) 『失楽園』第6巻、320-5行。

たアイネーアスの剣は人間の作ったトゥルヌスの剣を折ったということです²⁰⁾。ここでの寓意が神聖なものであるように、神が好意を寄せる人物にこういった寓意の武器を授けることは、古の東洋的な思考に合致しています。これを利用したのはホメロスだけに留まりません。大いなる栄誉と成功を担って選民の戦いをしたマカベア書のユダヤの英雄は、夢の中で預言者エレミアの手から剣を受け取っているのです²¹⁾。サタンがミカエルの剣によって傷つけられるとするつぎの一節は、ホメロスの模倣です。

それほど深くこの鋭い剣が身体に食い込み、無残な傷口を大きく
開けたからだ。だが、まだ彼の肉体は天使としての霊質を失っていなかった。
あいていた傷口はまもなく塞がった。しかし、もし天使が血を流すとすれば
かくもあろうかと思われるような、聖なる、血に似た体液が
その深傷から噴き出し、それまで絢爛と輝いていた鎧を染めていた²²⁾。

ホメロスは同様に、ディオメデスが神々を傷つけたとき、傷口からイコルスなわち人間の食べ物からは生まれぬ純粋な血が流れた、また、痛みは非常に大きかったが、不死を授けられている神々の傷口はまもなく塞がり、癒えたと言います²³⁾。

ミルトンが、戦いから逃げ出し、受けた傷の痛みに吠え声をあげる獐犢なモーロックの描写をするとき²⁴⁾、『イーリアス』の軍神アレスが手傷を負い、戦いから逃げ出すとき、戦闘開始をするときに全軍があげる雄叫びよりも高らかに叫ぶ場面²⁵⁾に目をつけたことは疑いありません。ホメロスは、全面戦争に加わっていたギリシア、トロイア双方がこの傷ついた神の吠え声に怖気づいたのだと付け加えます。読者はミルトンが嘲笑に走ることなく、このイメージの恐怖を保持している様子が簡単に理解できます。

或る所では勇敢なガブリエルが戦い、その軍旗を必死の勢いで
おしたててあの獐犢な王モーロックの陣営深く突入していた。
モーロックは反撃を加え、お前なんか戦車の車輪に縛りつけて
引きずり廻してやる、なぞと豪語したが、それどころか、天の
聖なる存在者に向かって罵詈^{ののしり}の言葉を吐くことさえ辞せなかった。
だが、それも次の瞬間には、腰のあたりまで斬り裂かれ、武器も
粉碎され、異様な苦痛に堪えかねて吠え声をあげて逃げる始末だった²⁶⁾。

ミルトンは同様に、第6巻の描写では、聖書の詩趣に富んだ箇所から受けた多くのイメージを用いています。以前にも取り上げたように、救世主の戦車はエゼキエルの見た幻がそのお手本となっています²⁷⁾。エゼキエルは、グロティウスが言うように、預言の詩趣に

20) 『アイネーイス』12.728-41

21) 『第2マカベア書』第15章第15節。

22) 『失樂園』第6巻、329-34行。

23) 『イーリアス』5.334-42

24) 『失樂園』第6巻、360-2行。

25) 『イーリアス』5.855-63

26) 『失樂園』第6巻、355-62行。

27) 『エゼキエル書』第1章第19節以下。

富んだ箇所はホメロスの聖霊にも影響を与えています。

叛乱を起した天使たちの軍勢を一掃するために救世主に与えられた栄光ある使命を伝えるつぎの詩行は、詩篇の崇高な一節から借用しています²⁸⁾。

汝、いと強き者よ、汝の父の力を信じて行くがよい。
わたしの戦車に乗り、天の大地を打ち震わせるこの迅速な
車輪を駆って出撃するがよい。わたしの軍勢を全員引きつれ、
強力かつ全能な武器である、わたしの弓と雷霆とを汝の身にまとい、
わたしの剣を汝のその強い腰に佩びるがよい²⁹⁾。

読者は容易にその他同種の筆致を数多く発見するに違いありません。

ミルトンが天使たちの戦いを取り上げるとき、ホメロスの神々の戦いに想像力を掻き立てられたことは間違いありません。ホメロスは人間、英雄、そして神々を戦いに巻き込みます。軍神マルスは戦う軍勢を励まして、大きな声を張り上げますので、戦闘の叫びと混乱の中でも彼の声ははっきりと聞き取れます³⁰⁾。同時に、上からはゼウスが雷霆を、下からはポセイドンが旋風を起しますので、戦場も山々の頂もすべて震え上がります。地の下を住処とする冥王自身も衝撃に吃驚仰天して玉座から跳び上がったのだとホメロスは語ります。その後、ウルカヌスがクサンドス川に火焰を降りそそぎ、ミネルウァがマルスに大石を投げつけたと語ります。ホメロスによれば、マルスは7エーカーにわたって倒れたとのこと³¹⁾。

ホメロスが神々の戦いにあらゆる荘厳で恐ろしいことを持ち込みましたので、ミルトンは善悪の天使たちの戦いを同様の恐怖で満たしています。軍勢の雄叫び、ガタガタと鳴り響く真鍮の戦車の車輪の音、飛び交う石や山々、地震、火焰、雷霆などが読者の想像力を高揚させ、この壮大な行為にふさわしい想念を与えます。ミルトンは、地球が存在する以前でも、地球全体が震え上がるのだと巧みに描写します。

天は隅々にいたるまで轟然と鳴り響いた。勿論まだ地球は
存在していなかったが、もしこの時存在していたら、
その心の心まで震え慄いていたかもしれない³²⁾。

彼がその後描く神の王座は別だが、全天が救世主の戦車の輪の下で震え上がっている様は実に崇高で理に適っています。

その燃えさかる車輪に^お圧され、勿論神の王座は別だが、
さしもの磐石不動の天も隅々まで震えあがった³³⁾。

救世主は恐怖と威厳に包まれて登場するのですが、ミルトンはそれでもなお読者に救世

28) 『詩篇』第14篇。

29) 『失樂園』第6巻、710-14行。

30) 『イーリアス』20.51-66

31) 『イーリアス』21.328-42, 403-14

32) 『失樂園』第6巻、217-19行。

33) 『失樂園』第6巻、832-4行。

主自身が語る以上のことを思いつかせる方法を見出しています。

しかし、御子の方はまだその力の半分も出してはおられなかった。

そして雷霆^{いかづち}を投ずるのを急に途中でやめてしまわれた。

彼らを滅亡させてしまうのではなく、ただ天国から根こそぎ

追放するのがその御心であったからだ³⁴⁾。

要するに、それ自体非常に偉大で、あらゆる学問で裏打ちされたミルトンの才能は、第6巻では、あらゆる点においてそのテーマに合致しているのです。つまり、詩人が考えるこの上なく崇高なものとなっているのです。彼は人々を感動させるあらゆる技を熟知していたので、たまには心を休ませ落ち着かせる機会を与える必要があることも分かっていました。そこで、彼は、読者が偉大な行為に新鮮な気持ちで立ち向かえるように、叙述を多彩にして緊張を和らげるための発話や意見や比喻や同種の息抜きを巧みに散りばめています。こうすることによって、気高い描写はさらに生き生きとしたものになっているのです。

第334号 1712年3月24日（月曜日）

【スティール】

君は我々の一人一人がそれぞれの分野で言わば
ロスキウスのような人物となることを望み、そして、
こう言ったからだ、欠点のあるものは嫌悪感を受ける
ことはないね。しかし、この点について、わたしは、
俳優の場合ほど我々弁論家の場合にはあら探しの眼で
見られることはないと思う。(キケロ)¹⁾

一生のうちでは思慮を欠いていたために恥をかいたことを軽く受け止めるということとはよくあることです。(賢明な人ならせいぜいどうでもよく、おおむねくだらないと考える)ある種の素養を実際に行使してみますと、この先入観があるためにひどい結果を招くことになりかねません。私の言いたいのは、ダンスの技能に関する心得のことです。私の知人に、大変な能力を備えた紳士がいましたが、この紳士は立派な人生を閉じるまでダンスの教育を受けなかったことを嘆いていました。彼が言うには、素晴らしい才能を行使するチャンスがなかったし、その必要性もほとんどなく、また、こういった才能はたしなみのない人からすれば、無用なものなのです。申し分のない物腰（適切な動き、身振り、表情）は、ある人にとっては生来のものですが、これも生まれつき持っているものが理性の力によって裏付けられ強化されますと、さらにその身のこなしは優美なものになるのです。このことを全く考慮しない人にとっては、理性の力のことを言えば奇異に思われるでしょう。だが、このことに少し気を配りますと、全く別の見方をするようになります。こういった

34) 『失樂園』第6巻, 853-5行。

1) キケロ『弁論家論』1.61.258

人たちにとっては、明白で信頼のおけるルールに照らしてみても、容貌が美しくお洒落な人でも理性を備えていなければさほどいい感じにはなりません。読書をするときには、文字の形状を逐一意識することはありません。子供のように文字を思い起こしつなぎ合わせたりにせず、習慣として無意識に読書をします。どんな教育であれ、自らの態度に注意を払わない人は、勉強を始めたばかりの子供がすらすら読めないのと同様に、人前では自由自在に振る舞うことはできません。普段の生活では、お互いに好ましい関係になりますと喜びは助長されますが、ダンスは最もかけ離れていると思える事柄においてもその立居振舞いに大きな影響を与えます。学識があり分別を備えた人物は、他の人々にとって難しすぎることに触れませんが、それでも際立ちます。同様に、腕の伸ばし方やごく当たり前の仕草を見れば、四肢と顔の表情を調和させるその方法を知っているかどうか分かります。ピュロス王役のブースがオレステスを迎えるために王座に向かうさまを見たことのある人は誰でも、歩みそのものに威厳が表れていることを納得します²⁾。おそらく、これを彼ほどうまくやれる人は他には誰もいないでしょうが、彼がダンサーであったら、さらにうまくやれたに違いありません。これを威厳を持ってやるのはとても難しいことですので、今はこのことについてはこれ以上深入りはしません。ところで、つぎの手紙の書き主はこれを実に巧みに言い表しています³⁾。そこで、この人のお陰で、別の考えをする人々が出て来るまでは、私としましては今後は何事もしみわたった考えをしなくて済みます。

観察者殿

技術であれ科学であれ、ほとんどすべてが、その先生、師匠、あるいは愛好家が思索的、実用的双方の点に関してその有用性、長所、および恩典をペンの力を借りて公表し、技術および科学を持ち上げ向上させていますので、古代の人たちが大層賛美した技術のダンスが、現代の人たちからは全く無視され、そのさまざまな長所およびその重要な美点を人々に奨励するペンの力が発揮されていないのをどのように考えたらよいのでしょうか。

現在見られるダンスの退潮は、その原因はまさにペンが沈黙しているからなのです。この技術は単に取るに足らない愉快なこととしか見なされていません。ダンスは未開拓のままなのであり、不幸なことに、無知で瑣末的との汚名をこうむっているのです。テレンティウスは、彼の作品の前口上で、芝居の観客を取り込む綱渡り芸人について不平を言っています⁴⁾、今日わが劇場では、とんぼ返りや宙返りをする軽業師が好まれ、それらがまっとうなダンスに取って代わっていると言えます。それゆえ、私はそろそろ誰かが助け舟を出し、そこに忍び込み、多くの美点を覆い隠している数多くのひどい誤解を取り除いて

2) パートン・ブース (1681-1733) は『ハムレット』では亡霊役、『ヘンリー4世』ではホットスパー役などのマイナーな役をやっていたが、1713年にはアディソンの『カトー』では主人公を演じ大ヒットする。

3) これはジョン・ウィーヴァーのこと。この人物は、数ヶ月後の9月11日に、『ダンスの歴史』という書物を出版した。

4) テレンティウス『義母』(165 B.C.) 序文。

やる潮時ではないかと考えているのです。ダンスにまともな光を当ててやりますと、その有用性や気品、そしてそこにある喜びや教訓が明らかになります。また、先生の向上および見物人の情報に繋がる原則を定めると、先生はそれだけうまく踊れるようになりますし、見物人はこれによって、(もしあるとすれば)ダンスの価値が判断できるようになります。

そこでこれほど勇敢な仕事ができる巧妙なペンの力を奨励し、現在ダンスが置かれている不利な状況をある程度救うために、ダンスを教えています私は、ダンスの歴史に関して評論としてささやかな論文を書いてみることにしました。そこでは古代、起源、用途を調べ、古代の人たちがどのような評価をしていたかを明らかにしました。同様に、いくつかの要素の特質や極致について考察を加え、素養としてもまた運動としてもいかに有益で楽しいものかを検討しました。そうして、ダンスに対する悪意に満ちた異議への反論を試みました。私は宗教的、軍事的、民衆的であれ、ギリシアとローマに特有のダンスの解説に取り掛かりました。そして、古代の舞台に関わるダンスに注目しました。そこではパントマイムがとても大きな部分を占めていました。この驚くべき技術を備えた何名かの師匠についての歴史的な解説もしました。その後で、舞台および紳士淑女のたしなみとして絶対に欠かすことのできない点双方に関して、現代のダンスに関する意見を述べました。結論として、ダンスが文字にされ、師匠から師匠へと伝えられることになる起源と進歩について簡潔に所見を述べておきました。もし今後素晴らしい才能の持ち主が登場して、この技術を申し分のないほど前進させたとしても、そこから何も期待できないものと思われる。なぜなら、技術と科学の起源を検討してみますと、出現当初は見劣りがして将来性のないものなのであって、こういった平凡な土台からどうしてこれほど驚くべき体系ができたのか不思議に思えるからです。偉大な才能とは何でしょうか。ガンガン鳴り響く鍛冶屋の槌の音が音楽の起源になったと考えた人は誰もいません。だが、マクロビウスは第2巻において⁵⁾、ピタゴラスは鍛冶屋の店先を通りがかったときに、槌から発せられる音は槌の重さによってその音が低くなったり高くなったりすることに気づいたと述べています。これをヒントにして、ピタゴラスは強度の同じ弦でいろいろなおもりをつるし、音は重さに呼応するのだということを発見しました。これを発見した彼は、協和音を生む数字を発見します。素材と張力が同じだが、1本をもう1本の半分の長さにすると、その2本の弦は旋律、つまり、オクターブという音程を生じさせます。同じ長さで量にして、張力を1本がもう1本の4倍にしても、同じことが生じます。このように最初には取るに足らないことから始めて、この偉人は単なる騒音を数学に結びつけることによって、非常に喜ばしい科学へと変換したのです。このようにして、彼は抽象的かつ論証的な科学へと到達したのです。それゆえ、動機が気品がある、あるいは、典型的なものであっても、すべて不変の科学に変換できる人物がそれを検討すべきなのです。たとえ、それが音から生み出した科学ほど論証的なものでなくても、重要な技術の仲間入りをする資格があるのです。

5) マクロビウスによるキケロ『スキピオの夢』の注解。マクロビウスは新プラトン主義の著述家。

さて、観察者殿、貴殿はダンス学校を訪れるとおっしゃっていましたので⁶⁾、これは間髪を入れず考慮すべきお仕事だと思います。私としましては、拙論を公表する前に、是非とも貴殿の助言を頂きたいと思います。同時に、どうしても貴殿の賛同が欠かせませんし、拙論はダンスを習う両親ならびに見学者としての若いご婦人方にもお読み頂きたいものと考えている次第です。何卒よろしくお願い致します。

3月19日、サロップより

敬具

第335号 1712年3月25日

【アディソン】

人々のマナーと暮らし方を注意深く観察しなさい。

そこから、お手本を見つけて人生の一齣を作るのです。

(ホラティウス)¹⁾

わが友サー・ロジャー・ド・カヴァリは、先日クラブで出会ったとき、この20年芝居を観に行ったことがないので、どうしても私と一緒に新作物の悲劇²⁾を観に行きたいと言うのでした。サー・ロジャーが言うには、『委員会』³⁾を観たのが最後ということでした。かねてからこの作品は英国教会に関わる出来のよい喜劇だと聞かされていなければ、私も観に行かなかったに違いありません。彼はその後でこの悲嘆に暮れる母親は誰のことかと尋ね、この母親がヘクトルの寡婦だと聞くと、彼女の夫は勇敢な人物で、学校時代に事典で彼の伝記を読んだことがあると言いました。つぎに、わが友は、夜遅く帰宅すると、モーホックの連中がうろついていて危険ではないかと尋ねるのでした⁴⁾。先日の夜、確実に彼らに捕まったと思った、なぜなら、黒い服を着た屈強な輩2、3人がフリート街まで私の後をつけて来たのだ、彼らをやり過ごそうとする私の歩調に合わせるようにつけて来たのだと言います。彼らは絶対に私を獲物にしたかったのだと思うよ、と笑いながら彼は続けました。近隣の誠実な紳士で、チャールズⅡ世の御世にそういった罠にかかり、それ以後二度と町に足を運ばなかった人物のことを覚えているとのこと。彼らがそんなことを

6) ダンスの学校については、第296号、第308号、第314号参照。

1) ホラティウス『詩の技法』317-18

2) 新作物の悲劇とは、アンブローズ・フィリップスの『悩める母』のこと。この作品は、ラシーヌ『アンドロマック』の翻案。初演は1712年3月17日、ドゥルーリー・レイン劇場にて。初演に引き続き、18日、20日、22日、24日、25日、27日、29日と計8回にわたって上演された。配役はビュロスをブース、フェニックスをボウマン、オレステスをパウウェル、ピュラデースをミルズ、アンドロマックをオールドフィールド夫人、セフィサをナイト夫人、ヘルミオネをポーター夫人など。プロローグはスティール、エピローグはバジェルだった。

3) 『委員会』は、サー・ロバート・ハワードの1662年の作で、大内乱時代の仮差押え委員会のことを風刺した作品で人気を博した。

4) モーホック・クラブについては、第324号参照。

考えているなら、自分なら見事に手玉にとってやるのだが、と彼は言います。彼が言うには、自分は老練なキツネ狩りのハンターなのだから、身をかかわすのは得意であり、彼らがこれまでに経験したことのないような罠をたっぶり見せてやれるのだがとのことでした。サー・ロジャーはさらにつぎのように付け加えたのです。この紳士諸氏にその積りがあっても、うまくはいきはしませんよ。なぜなら、ノーフォーク街⁵⁾の端で彼らを出し抜いてやるのだから。そこまで行けば、曲がり角で彼らを巻いて、気づかれずに宿に逃げ込むのだと彼は言います。しかしながら、勲爵士が言うには、セントリー大尉が明日の夜私たちと行動を共にして、芝居小屋が満席にならないように、二人が4時ごろに私の家に来てくれたら、ジョンによれば車輪の修理が済んでいるので、馬車を用意させておくとのことでした。

約束の時間を違えたことのない大尉は、サー・ロジャーに、自分はステーンケルクの戦い⁶⁾で使用した剣を帯びているから、何一つ恐れることはないと言いました。私が気づいたのですが、サー・ロジャーの召使たち、とりわけ、わが旧友の執事は主人に仕えるために立派な櫓の木を準備していたのでした。彼の左手に私が、彼の前には大尉が、執事が後部の従僕たちの先頭に、それぞれ陣取り馬車に乗り込み、彼を無事に芝居小屋まで護送しました。そして入口まで整然と進み、大尉と私と彼は劇場内に入り、二人して彼を両脇から挟むようにして平土間席に腰を下ろしました。芝居小屋が満席となり、ロウソクに明かりが灯されると、わが友は立ち上がって満足気にあたりを見回しました。この満足感には、互いに満ちたりて、共通の同じ娯楽を共にする大勢の人たちを目にしたときに自然に湧いてくる慈愛といったものが彩りを添えられていたのでした。私は内心、平土間席の中央で立ち上がる彼が、悲劇の観客にとってまさにそれにふさわしい中心的人物と思わざるを得ませんでした。ピュロス王が登場して来ると、勲爵士はフランス王がこんな威張った歩き方をするとは思わなかったよ、と私に言いました。私は実際わが友の感想を謹聴しました。なぜなら、彼の感想は至極当然な批評だと考えたからです。そして、場面が終わるたびに彼が口にするどんな結末になるのだろうという感想に、私はとても満足したのです。彼はアンドロマケのことをとても気に掛けているようであり、一方でヘルミオネのことも同じように気に掛けているのでした。同時に、ピュロスの行く末を考えて、当惑していたのです。

サー・ロジャーは恋人の要求を頑迷に拒絶するアンドロマケを目にすると、絶対に彼女は彼を受け入れないね、と私の耳元で囁きました。それに、いつもにない激しい口調で、寡婦とどんな関係があるのか分からない、と付け足しました。その後、ピュロスが彼女の元を去ると威嚇すると、勲爵士は頭を振ってやれるものならやってみろとつぶやくのでした。この箇所はわが友の心に残ったので、第3幕が終わると、私は別のことを考えていたのですが、この寡婦たちはこの上ないひねくれ者だね、と私の耳元で囁きました。批評家

5) ノーフォーク街は、アランデル街とサリー街の間にあり、テムズ川に向かって走っている。

6) ステーンケルクの戦いにおいて、ウィリアム3世指揮のイギリス・オランダ・ドイツ連合軍は、リュクサンブール公指揮のフランス軍に敗れた。

である君に尋ねるが、この劇は君の演劇ルールに合っているのかね、悲劇の人物の語りは理解されないといけないのではないかね、この劇の台詞は私にはどれひとつその意味は分からないよ、と彼は言います。

私がこの老紳士に返答をしようとしていたときに、運よく第4幕が始まりました。勲爵士は非常に満足して腰を下ろしながら、これからヘクトルの亡霊を見ることになるのだなと言います。そうすると、彼は再び芝居に集中し、時々寡婦を褒め称えるのでした。実のところ、彼は小姓の一人を、彼が最初に登場したとき、アステュアナクスだと勘違いしましたが、すぐに気がつきました。とはいえ、どうみても立派な少年に違いないこの少年を見ることが出来てうれしく思う言ったのですが。ヘルミオネがピュロスへの威嚇の言葉を残して退場するとき、観客は拍手喝采するのです。それに対して、サー・ロジャーはどうみても名うての女だなと付け加えたのです。

演技が行われている間は、観客は著しい沈黙と静寂に包まれましたので、幕間には、観客はごく当然のように役者やその役割についてあれこれ意見を述べました。観客の一群がオレステスを称えるのを耳にしたサー・ロジャーは、その一群に横から口を挟み、自分は彼の友ピュラデースはとても分別があると思うと彼らに言いました。その後彼らがピュロスを称賛していると、サー・ロジャーは再び口を挟み、自分としては、ほかの人物もさることながら、ほとんど口を開くことがないけど、口髭を生やした老人⁷⁾が気に入ったと言うのです。セントリー大尉は、近くに座っている若者2、3人を見ながら、サー・ロジャーの言うことに耳をそばだて、勲爵士が彼らに馬鹿にされなければいいと願いながら、勲爵士の肘を引き、彼の耳元で何か囁くのでした。大尉は5幕が始まるまでそうしていました。勲爵士は、ピュロス殺害について語るオレステスの言葉にとっても熱心に耳を傾けていましたが、その台詞が終わると、彼は私に向かって、とても血生臭いことだね、舞台で行われなくてよかった、と語ります。その後取り乱したオレステスを見ると、彼はいつもになく真剣になり、その機会を捉えて彼なりに邪心について道徳的なお話をし、狂気に包まれたオレステスはまるで何かを見ているようだね、と付け加えました。

芝居小屋にやって来たのは私たちが一番でしたが、芝居小屋から出て行くのは私たちが最後でした。わが老友に人込みの中を掻き分けて進ませたくなかったので、人がいなくなるのを待つことにしたからでした。サー・ロジャーはすっかり満足して芝居小屋を後にし、来た時と同様に、宿まで彼を護衛しました。私としては、上演そのものだけでなく、善良な老紳士が大いに満足したことを大いに喜びました。

第336号 1712年3月26日（水曜日）

【スティーラー】

年長者は若者が傲慢であることをあからさまに嘆く。

7) 髭を生やした老人とはピュロス王の顧問官フェニックスのこと。彼の台詞はわずか65行だったとのこと。

若者は生意気で、ロスキウスや謹厳なイソップがやっていた芝居を認めないと。それは年長者が自らの嗜好で判断し、自分たちの好みに合わないものを除外してしまうからだ。おそらく年長者は、年少者の判断をすべて馬鹿にし、かつて自分たちが学んだことはすべて無駄だと考えたくなく、無視するのが最適だと思うからだ。

(ホラティウス)¹⁾

観察者殿

貴殿は日々学問と良識を奨励しようと努力されていますので、小生としては、何が促進につながり、何が阻害するのかを述べて貴殿の考察に委ねたいと思います。代々、お年寄りや専制的な慣行が支持し続ける悪があります。小生としては、貴殿の観察者としての権威によってこの悪の蔓延に時宜を得た歯止めをかけて頂きたいものとする次第です。小生が言いたいのは、ただ単に年長者であるということで、年少者を押さえつけようと高圧的な態度を取る老人のことなのです。この結果、年長者に歯向かう元気一杯の若者は、許しがたい無礼者であり、自然の掟を覆す不屈き者と見なされるのです。実を言いますと、小生は若者ですが、誰よりも老人を尊敬しています。ところが、お年寄りたちと同居していて、彼らがそれとなく喋っているのを、あるいは、理屈に合わない話をしているのを耳にしますと(賢明な人にも、時として、不合理、偏見、誇り、あるいは利害が入り込むのですが)、良心が虚礼にへつらう必要がなく、真実が従順の犠牲にならなければ、年長者の論法を修正することは何一つ無礼なことにはならないと思います。尊敬すべきお年寄りのこういったすさまじい論法や眩惑するような話の展開を前にすると、最強の主張も生彩を欠き、この上なく鮮やかな証言も影を潜めてしまいます。若者は間拔けで、まだまだ経験不足なのだと一言でおしまいなのです。このようにして、私たち若者は、大望は封じ込められ、怠惰をむさぼることになります。つまり、若いときには本来の自分を発揮する機会はなく、年を取ると体力の衰えが分別の強さとして認められなくてはならないのです。私たちとしては、白髪頭が矛盾否定の攻撃にさらされないことを期待します。さて、貴殿は我々若者の学問追究の活動に活力を与えてくださり、我々の置かれている状況を考慮してください。さらに、勇敢なるエリフの心情に光沢を与えて、若者の権利を擁護してくださり、有害な加齢の浸食を防いでくださいます。そこで、貴紙を雄々しい若者の論法で飾っていただけるものと考えます。何卒、これを貴紙に掲載していただきたいものと思います。必ずや、貴紙の読者の知性に訴えかけるものと確信しています。

これら三人の者はヨブに答えるのをやめた。ヨブが自分の正しいことを主張したからだ。その時、ラム族のブズビとパラケルの子エリフは怒りを起した。すなわちヨブが神よりも自分の正しいことを主張するので、彼はヨブに向かって怒りを起した。またヨブの三人の

1) ホラティウス『書簡詩』2.1.80-85

友がヨブを罪ありとしながら、答える言葉がなかったので、エリフは彼らにむかって怒りを起した。エリフは彼らが皆、自分よりも年長者であったので、ヨブに物言うことをひかえて待っていたが、ここにエリフは三人の口に答える言葉がないのを見て怒りを起した。ブズびとパラケルの子エリフは答えて言った、「わたしは年若く、あなたがたは年老いている。それゆえ、わたしははばかって、わたしの意見を述べることをあえてしなかった。わたしは思った、『日を重ねた者が語るべきだ、年を積んだ者が知恵を教えるべきだ』と。しかし人のうちには霊があり、全能者の息が人に悟りを与える。老いた者、必ずしも知恵があるのではなく、年とった者、必ずしも道理をわきまえるのではない。ゆえにわたしは言う、『わたしに聞け、わたしもまたわが意見を述べよう』。見よ、わたしはあなたがたの言葉に期待し、その知恵ある言葉に耳を傾け、あなたがたが言うべき言葉を捜し出すのを待っていた。わたしはあなたがたに心をとめたが、あなたがたのうちにヨブを言いふせる者はひとりもなく、また彼の言葉に答える者はひとりもいなかった。おそらくあなたがたは言うだろう、『われわれは知恵を見いだした、彼に勝つことのできるのは神だけで、人にはできない』と。彼はその言葉をわたしに向けて言わなかった。わたしはあなたがたの言葉をもって彼に答えることはしない。彼らは驚いて、もはや答えることをせず、彼らには、もはや言うべき言葉がない。彼らは物言わず、立ちとどまって、もはや答えるところがないので、わたしはこれ以上待つ必要があろうか。わたしもまたわたしの分を答え、わたしの意見を述べよう。わたしには言葉が満ち、わたしのうちの霊がわたしに迫るからだ。見よ、わたしの心は口を開かないぶどう酒のように、新しいぶどう酒の皮袋のように、今にも張りさけようとしている。わたしは語って、気を晴らし、くちびるを開いて答えよう。わたしはだれをもかたより見ることなく、また何人にもへつらうことをしない。わたしはへつらうことを知らないからだ。もしへつらうならば、わたしの造り主は直ちにわたしを滅ぼされるであろう²⁾。

拝啓

私は以前、偶像やご婦人方が取り仕切るコーヒーハウスでの殿方の振舞いについての記事を大いに満ち足りた気持ちで拝見したことがあります³⁾。そして貴方がインドや中国の店をいつ取り上げてくださるか心待ちにしていました。ところが、貴方はわたしたちのことは一言も触れず無視なさってしまいました。貴方は触れる価値がないとお考えになられたのか、それとも、わたしたちの不満が貴方の目に届かなかったからなのでしょう。そこで、私は貴方に直接不満を訴えることにしました。今のところ貴方がお暇そうですのでその気になった次第です。実は、私は中国の店を持っているのです。こう申しては何ですが、立派なお客様にも恵まれます順調なのです。要するに、道楽女のクラブがなければ、私は楽にやっていける可能性が十分にあるのです。彼女たちは本当に無邪気なお喋りをする

2) 『ヨブ記』第32章第1節-第22節。

3) 第73号、第87号、第155号参照。

とか、憂さ晴らしをするという口実で、彼女たちに他のどんな目的があるのか分かりませんが、必ずと言っていいほど、1日に2度3度私の店に顔を出し、お茶を値切ったり、ついたてを言うと言って私を困らせるのです。この道楽女たちは貴方の言う流行に左右される怠け者なのです。することが何も無い彼女たちは私の店の商品をかき回すことに専念するのです。このお客のようでお客でない人たち（彼女たちが何かを買って行くことはまれですが）の一人は茶道具一式を、またある人物は水盤を、三人目は最高の緑茶を所望します。そして、あげくはパンチボウルにまで手を出し、商品はすべて動かさざるを得なくなります。その結果、商品の陳列は乱雑になってしまいます。私は彼女たちを家庭のお手伝いが綺麗に整理したお皿の配列を無茶苦茶にすることに喜びを見出す夜の小鬼に喩えるのです。こういったドタバタの大騒ぎが済むと、高くつきますし、彼女たちは忌避することになります。愛嬌はありますが望ましいことではありません。すなわち、ご婦人方は憂さ晴らしにはなりますが、私は得るものは何一つないのです。私の労力を考えると、お茶の一杯にどんな意味があるのでしょうか。観察者様、憂鬱は手に負えません。私自身はその気はありませんが、私は彼女たちのせいで、自分が鬱にかかっているよりもひどい目にあわされるのです。こういった昼間の小鬼には店にやって来ないように、たとえ店に来ても面倒をかけないように警告を発して頂きたいのです。そして、私たち正直な店主には、無料で憂鬱症にかかった皆さんを治癒することよりも、やるべきことがほかにあるのだということを彼女たちに説得して欲しいのです。学校に行っている私の幼い息子が私の秘書をしています。どうかこの一件を考慮して下さることを願っています。

敬具

3月22日、悩めるレベッカより